

友への手紙

朝日新聞
01 (H13). 1. 16

歌人 道浦 母都子さん



高校一年のクラス写真。その写真を見るたびに胸が締めつけられる思いがする。クラスで一人、私だけが違う服装をしているからだ。クラスメートの女子学生は全員、紺のブレザーにボックスブリーツの制服。それなのに私はセーラー服姿である。セーラー服は中学時代のもの。入学して何カ月後に撮影された写真なのか、それは定かではないが、とにかく私は

言葉の力で立ち直れる

高校になっても、自分のあいで、和歌山県下の高校を受けない。しかも入学した高校は、中学校の制服のまま通学。その成績をもって大阪の名だたる進学校。高校一年一

府立高校を再受験。そんな過なかつたわけではない。もって複雑な理由があった。当時の私には分からなかつた家庭内の事情である。

中学卒業と同時に、それまで住んでいた和歌山市から大阪へと移り住んだ。ちょうど春休み最中の転居だったの

学期の成績は、目もあてられないものであった。悲しかったが、成績の件は何とか納得できた。地方都市と都会の学校とのレベル差と思い至ったからである。

つらかったのは、母が自分からである。母が自分から新しい制服をつくらな

屋の大学に進学して、私は学校でも家に帰っても独りぼっちだった。昼食用の弁当も自分でつくって持参するようになった。学校から帰るとピアノに向かい、愛犬と近くの森を散歩する。それが唯一の救いだった。これから先はどうなるの

「私は悲しい」と書けば癒がこぼれ、「だれも私をわかってくれない」。そう記すと、書いた文字が「そんな」とない、首を振ってな

いどけないの。三起テパートでつくるとして。連れ日て、生きて意味を見失ってくり返したのか。だが母は、ほとんど無反応だった。

父と母のあいだには、会話という会話はなく、姉は名舌

幼いころから本の読書好きであったし、作文が得意であった。ピアノに向かって歌

言葉との中

窓からは、それまで知らなかつた世界が次第に見えてくるようになり、窓を通して明るく登んだ光が届き、凍りついたままの私の心をあたたくはぐしてくる感があった。

日記とは自分から自分への手紙。その手紙が、知らず知らずのうちに独りぼっちだと思っていた自分以外のひとや

物や自然に目を向けることを教えてくれた。

「だれも私をわかってくれない」「私は独りぼっち」。正直に自分の悩みを打ち明ける手紙や短歌を若い人からいただくことが、最近多くなつた。かつての私同様、不安や孤独の中で迷っている若い人々には日記をつけたり、自分への手紙を書くことにより、言葉といふかけがえのない友人を見つけてほしいと思う。今すぐにノートとペンさ

えあれば、出来ることでもあるから。

ひとを傷つけるのも言葉、優しくなぐさめるのも言葉。いえ、ひとだけではなく、自分を含め、この世界のすべてを結ぶ鍵は、言葉なのでは。私自身の体験からそう信じているからである。

言葉との中

言葉との中

言葉との中

言葉との中